

コロナ禍は演劇文化に何をもたらしたのか —ドイツと日本の事例—

日時：2021年12月9日（木）17:00～18:30

場所：神戸大学 国際文化学研究科（中会議室）

*オンライン同時開催（申し込み方法は下をご覧ください）

登壇者：アンネグレット・ベルクマン博士

（東京大学大学院人文社会系研究科特任准教授）

* 講演と質疑応答は日本語で行われます。

* 参加費は無料です。

参加形式：対面参加またはオンライン

申し込み：<https://bit.ly/promis1209>（オンラインをご希望の場合）

*会場対面参加をご希望の場合は、上記の参加フォームには申し込まずに直接ご来場ください。

本講演では、コロナ・パンデミックの際にドイツと日本の政治が取った演劇または劇場に対する対策の相違を扱います。第1部では、事例を交えて両国の劇場の援助策について触れ、第2部では、この危機がもたらした演劇界の問題に焦点を当てます。とりわけ、コロナ禍という非常事態は、両国の演劇や芸術文化が社会の中でどのような位置を占めているかを明らかにしました。この危機的状況の中、ドイツでは劇場における権力構造と多様性についての議論がさかんに行われ、特に公共劇場での凝り固まった制作構造に疑問が投げかけられています。これに関連して、本講演では両国での文化事業としての劇場における男女の機会均等についても取り上げたいと思います。

講師略歴

ボン大学と早稲田大学で日本学、東洋美術史、中国学を学び、トリーア大学で日本学の博士号を取得。研究テーマは日本の演劇史、視覚文化の中の演劇、文化政策、日本の陶磁器やグラフィック・アート。最近の著書は*Nationaltheater in Japan: Transfer einer europäischen Theatertradition* (2018), 「Scenic Beauty – Framing Japanese and European Performing Arts in Landscapes: Scenery by Léonard Foujita」『*Art Research*』(1/2020)、 「Goshomaru: Kabuki Zeitgeist in Tea Bowls」『*亞洲藝術與美學*』*The Journal of Asian Arts & Aesthetics* (6/2020)。

